

[教育方法一般]

被災地訪問が子どもたちに与えた影響についての一考察

－「知的活動」と「体験活動」を効果的に行うための単元構成の工夫－

恩田 知弥*

1 東日本大震災被災地訪問の背景

平成23年3月11日、巨大な地震と津波が東北地方を襲った。当校高学年の子どもたちは、幼児期の中越大震災の体験から、被災地で暮らす人への思いを巡らせた。被災した仙台市に当校と同名の四郎丸小学校があることを知ると、自分たちにできることを考え、応援のメッセージと義援金を送った。しばらくして、仙台市立四郎丸小学校からビデオレターが届く。災害に遭いながら前向きなメッセージを語る子どもたちを見て、「直接会って励ましたい。」と思うようになり、中越大震災を上回る被害の大きさに、「被害の状況を自分の目で確かめたい。」と、被災地への関心を高めてきた。

平野^①は、「子どもが対象に主体的にかかわり、追究するとき、体験が体験として豊かな学びを生み出す」として、体験活動における子どもの主体性の必要性を述べている。「行ってみたい」「活動したい」という子どもたちが主体的に関わりたいたいという意思決定が示されている今、被災地へ行き、被害の状況を自分の目で確かめることで、災害の力や恐ろしさを知り、被災した人々を思いやる気持ちを持ち、災害に備えようとする気持ちが育まれると考えた。

当校児童が、東日本大震災被災地での体験活動を行うことで、子どもたちそれぞれが災害体験を想起して、災害に対する思いや人への思いやりの気持ちを一層強くすることが予想されることから、本実践の取組を始めた。

2 研究の目的

本研究は、高学年児童に被災地での体験活動を中心とした「絆 つながり 子どもたちが見た東日本大震災」の単元構成を実践することにおける学習の成果を児童の活動や記録から推察し検証するものである。

3 知的活動と体験活動を繰り返す「絆 つながり 子どもたちが見た東日本大震災」の単元構想

木原^②は、「体験活動の前後に理性を重んずる知的な活動を伴わないと、彼らの能力・資質の向上には功を奏しない場合が多かろう」と述べる。そこで、被災した人々を思いやり、災害に備える意識の高い子どもたちを育てるために、知的活動と体験活動を繰り返す「絆 つながり 子どもたちが見た東日本大震災」単元を構成し実践を行う。

- (1) 調べる ～知的活動～
 - ・被災地の状況を調べて体験活動の課題を明確にする。
- (2) 学ぶ ～体験活動～
 - ・被害の現状を体感し、自己の課題を解決する。
- (3) まとめる ～知的活動～
 - ・解決した現地での学習を整理し、発信の方法を考える。
- (4) 発信する ～体験活動～
 - ・まとめたことを発信し、交流する。
- (5) 次の学びへ ～知的活動～
 - ・記録を残し、被災地への思いを継続できるようにする。

年・月・日	できごと	
H16.10.23	中越大震災発生、四郎丸小学校近隣校で分散授業を行う	
H17.1.6	全員揃って授業を再開する	
H23.3.11	東日本大震災発生	
3.18～23	募金活動を行い123,213円が集まる	調べる
3.25	仙台市立四郎丸小学校に義援金を送付する	
7.14	お礼のDVDが届き全校で視聴する	学ぶ
9.20～	被災地訪問を決定し、事前学習を始める	
10.10, 11	被災地訪問を行う 石巻市・名取市へ	
10.12～	被災地訪問のまとめを行う	
10.30	文化祭で在校児童・保護者向け発表会を行う	発信する
11.26, 27	市民向けに発表展示会を行う	
H24.3.11	冊子完成・配付	次の学び
5.1～	6年生が総合で被災地学習を始める	
10.9～11	被災地訪問を行う 南三陸町・石巻市へ	

◁「絆 つながり 子どもたちが見た東日本大震災」構想図▷

* 見附市立見附特別支援学校

4 研究の対象及び方法

(1) 研究の対象 体験活動参加児童（5，6年生児童会委員長および参加希望者 計30名）

(2) 研究の方法

体験活動によって、児童の中にどのような気持ちが芽生えたのかを行動の様子や児童の記録から推察し、その気持ちが芽生えた主たる要因を探る。また、特に変容を望みたい2人の児童を抽出し、本単元によってどのような変容が見られたのかを明らかにする。

A児（6年生女子）は、見通しをもって活動することができ、児童会の委員会では委員長を務め、円滑な運営を心がけている。そのため、友達へのかかわり方が指示的になり、友達との関係が気まづくなってしまう場面も見られる。人と優しくかかわろうという思いやりの気持ちを高めることで、よりよい人間関係を築くことができると考える。

S児（6年生女子）は優しく、良好な人間関係を築いているが、友達に対して遠慮してしまうことがある。そのため、話し合い等では、自分の主張を述べることができず、S児のもつ考え方の良さが伝わらないことがある。S児には、自己肯定感を高め、進んで自分の考えを表現するようになってほしいと願っている。

5 研究の実際

(1) 調べる ～被災地の状況を調べて体験活動の課題を明確にする。～

全国紙だけでなく、当地の新聞や写真誌等の資料を準備し、事前学習を行った。がれきだけが残った景色や松の木よりも高い津波など、目を疑うような写真が掲載されており、子どもたちは、驚きながら学習を進めていた。資料は、子どもたちの心に被災地の事実を伝える反面、非日常的な状況や架空の戦闘場面などをテレビや映画の中で目にするの多い現代の社会において、写真からでは現状を切実に感じ取れない児童がいる様子も伺えた。



図1 資料を読む児童

また、調査を行う中で、全国紙からは時間とともに震災に関する記事が少なくなってきていた。児童の中には、「震災から時間が経っているから復興は進んでいるのだろう。」という意見も出てきていた。事前学習の中で、児童がそれぞれに被災地の様子のイメージをもつことができた。A児とS児は現地へ行くことについて次のように課題を設定した。

— A児の「調べる」に関する記録 —

仙台市立四郎丸小学校の人と会って、津波の話の聞いたり交流を深めたりしながらはげましたりして立ち直ってほしい。私は、被災地の状況をしっかり見てきたいです。なぜなら、テレビで見ている、あまりよく伝わってこないからです。被災地の今の本当の状況を見てきたいです。

— S児の「調べる」に関する記録 —

私は、被災された方が今までどんなことを思いながらここまで来たのかを考えながら見てきたいと思っています。私は、一目見ただけで大変そうと思うような経験をしたことがないからです。被災地の様子をテレビで見て、正直「ひどいな。」と思います。だから行くことは少し怖いです。

※下線は筆者が、児童の心情がよく表れていると考えているところ。（以下児童の記録については同じ）

(2) 学ぶ ～被害の現状を体感し、自己の課題を解決する。～

〈日程概要〉

1日目 石巻市日和山公園からの視察 = 公園から見た海岸線の視察・門脇小学校 = 石巻市海岸清掃 = 学習のまとめ
2日目 名取市閑上地区視察 = 仙台市太白区社会福祉協議会長の講話を聞く = 仙台市立四郎丸小学校との交流

（※ 現地での活動は、視察・ボランティア活動、講話、交流活動で構成した。）

① 視察・ボランティア活動

石巻市の高台にある日和山公園からは、広範囲に海岸線が見渡せる。基礎だけで何もない住宅街、堆く積み上げられたがれきの山は、あらかじめ予想していた情景と異なり、時間とともに復興が進んでいると考えていた子どもたちの想像を大きく覆す。

現地NPOで震災復興をしている宇都宮氏は、子どもたちに震災当日に起きた恐ろしい現実を語りかけた。高台から見た海岸の町に下りてみると、何もない光景の中におびただしい数の生活品が散乱していた。

子どもたちは、被災場所を歩き、多くのことを感じた。翌日訪れた名取市閑上地区は、海岸から平らに広がる住宅街であり、建物の基礎だけが残されている風景が一面に広がっ



図2 説明を聞く児童

ていた。子どもたちは、石巻市の状況と重ねて考え、東日本大震災の計り知れない被害の全容を想像し、言葉を発することもなく現状を凝視し、「本当に、ここにも何もなかった。」とつぶやいた。

市内長浜海岸へ移動して行った清掃では、やりきれない気持ちを感じたのだろうか、90分間黙々とゴミを拾い続けていた。伝えることが決して得意でないS児が、ボランティア活動を終えて、同じ学年の子どもたちがどう考えているのか聞いて、それを多くの人に伝えたいと記録している。

〈視察でのS児の学び〉

これほど大きな津波の被害をうけた方がどれだけ苦しんだか、亡くなった方の家族がどれだけ悲しんだか、私たちでははかり知れない。だから、明日の研修は、同じ6年生がこの状況をどのように感じたかを聞いて長岡に帰り、一人でも多くの人に伝えたいと思った。



図3 関上地区を見つめる児童



図4 海岸清掃に取り組む児童

② 交流活動 —仙台市立四郎丸小学校児童との交流で伝えることへの意欲を高める。—

同校は、海岸から4kmの位置にあり、近くを通る仙台東部道路で津波が止まり、大きな被害を逃れた地域である。「いつ揺れるか分からない。」「津波がどこまで来るか分からない。」という生々しい状況を聞くことができた。被災地を見て大きな驚きを感じたS児は、同年代の人の思いを聞きたいと記録している。そして、交流活動で「中越大震災の時の私は小さかったけれど、いつまでも揺れていて怖かったことだけはよく覚えている。」と話した際に、「そうだよ。いつまでも揺れているから怖いよね。」と受容された時、自分の話を聞いてもらうことのうれしさを感じ、相手も同じ気持ちで自分の思いを聞きがっていることに気付いた。

〈交流におけるS児の学び〉

仙台の四郎丸小学校にいざ行ってみると仲良くなるだけではなく、相手の気持ちや感じたことを聞き、体験した事を教えてもらい、それに対して自分がどんなことを思ったのかを伝えることも大切だと感じた。

(3) まとめる ～解決した現地での学習を整理し、発信の方法を考える。～

① まとめから見える体験活動の影響

右の表1は、学習のまとめとして作成した児童の新聞に掲載された全77枚の画像の活動別割合である。最も多い画像は石巻市の海岸風景で62%に達している。ここに、名取市関上、日和山公園の風景を入れると使用された写真の割合の85%になる。被災地の現状を自分の目で見たこと、感じたことが子どもたちに大きな影響を与えたことが分かる。現地で受けた仙台市の被災状況の講話は子どもたちにとって非常に分かりやすいものであったが、まとめとしては使われなかった。体験活動によって自分の見たこと・聞いたこと・感じたことを伝えたいという思いを感じることができるデータである。

表1 学習新聞に掲載された画像の活動別割合

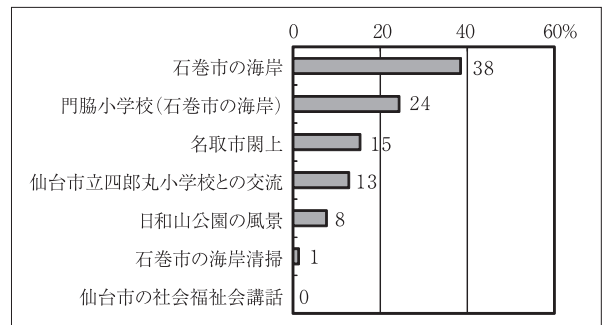
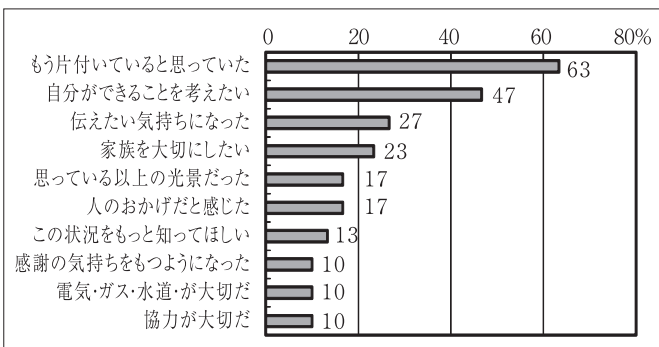


表2 現地へ行って変わったと自分が感じる事



左の表2は、同じように「現地へ行って変わったと自分が感じる事」に多く見られた文章の割合を示した。この結果から、子どもたちが事前の学習において資料から感じる事には一定の限界があることが分かる。63%の児童が、「(がれき等は)もう片付いている。」と思い、現地で復興がほとんど進んでいない現実を知ることになった。自分の作ったイメージと大きく異なる現実によって、体験活動が豊かな学びとなった。「ここまで復興が進んでいない」という現実が、強い活動意欲や伝達意欲になり、「この状況を伝えたい」「何かしたい」という強い気持ちをもつことができたのだらうと考える。

① 学習新聞に見えるA児の変容

A児は、海岸沿いの草むらでぼろぼろの文集を見つける。門脇小学校の卒業文集である。中を開いたが、何も読めない。A児はここから感じたことを新聞にまとめた。(図5)

石巻市の海岸沿いにある門脇小学校は、地震と津波、その後の火災で建物が全焼する被害を受け、その校舎は、黒い廃墟となって何も無い草むらにそびえている。しばらくこの文集を眺めていたA児は、「津波は現在のものだけでなく、過去の思い出もたくさん流してしまった。」と考える。そこで、復興しなければいけないのは建物や町だけではないことに気付く。「被災した人の心の傷が治ってこそ、はじめて復興と言える。」と被災者に寄り添い、被災地の未来に向けた思いを記述した。

焼け焦げた学校と流された卒業文集がA児の心に、被災者の心の傷を思いやる優しい気持ちを芽生えさせた。

(4) 発信する ～まとめたことを発信し、交流する。～

① 在校児童・保護者への発信

現地における「学ぶ」体験学習から3週間後の文化祭で在校児童・保護者・地域に向けて、学習新聞を掲示し、一人一人が感じたことを写真と一緒に報告した。低学年児童も関心をもって聞き、復興が進んでいると思いついでいた来場者は、メディアが伝えない被災地の姿に驚いた。

現地体験をした子どもたちの言葉は、被災地の現状や自分たちが感じたことを大人にも子どもにも分かりやすく伝えることができた。

報告会を聞いた4年生の児童は、テレビよりも分かりやすいと感じ、アンケートに次のように感想を書いている。

〈4年生児童の感想〉

報告会を見て、テレビで見た時よりも津波が大きかったことが分かったし、がれきの量がとてもたくさんあってびっくりした。「私はできる限りのことをして被災地の人の力になりたい。」と、思いました。

② 市民への発信 ー交流を求めてー

文化祭での発表後、来場者による肯定的な感想が多かったことから、子どもたちは、自分たちの活動に大きな成果があったことを自覚する。そして、より広域に、より多くの人に発信したいという意欲が高まった。そこで、この主体性を継続させるために、活動の様子をパネルにしたり、発表の仕方を考えたりして、長岡市の中央図書館を会場にした発表報告会を開催することにした。発表報告会では、「来館者に自分から進んで声をかけて説明する」ことを課題に、交流を求めて取り組むことにした。S児は、自分から声をかけるという積極性の必要感を記述した。

「発信する」におけるS児の学び

言葉にできないほど何も無い被災地で、それを何とか復興させようと協力したり、こんな状況なのに、助けてくれた人に感謝をして様々な気持ちをもっていることをみんなに伝えたい。(音楽会でやった)報告会を午前と午後2回ずつくらいやる。それと新聞もいっしょに見てもらい、質問をされたらしっかり答えて、質問されて答えるだけでなく見ていてる人に自分から声をかけてその人が見ていることについてくわしく説明するといひ。

子どもたちは来館者を見つけると、自分から側に寄り、進んで説明を始めた。S児も、自分から来館者に声をかけ、自分の思いを伝えようとしていた。子どもたちが「伝えたい」気持ちをもって語る言葉は来館者の心に響き、涙を流し



図5 A児の学習新聞(実物はA3版)



図6 スクリーンで発表する児童



図7 来館者に活動を説明する児童

ながらその説明にうなづく姿が見られた。報告会には、2日間で述べ700人以上が訪れ、多くの感想が寄せられた。

〈長岡市内の来場者の感想〉

新潟日報の投書欄でこの会のことを知りました。とても大変だったけれどよい経験、ずっと自身のため、みんなのためになる素晴らしい体験をしましたね。

中越地震後、小さい子たちの心が心配でしたが、そのあなた方がこれほど立派に成長したことをとてもうれしく思います。東北の方々にもあなた方の思いは届いていますよ。

〈四郎丸小学校保護者の感想〉

パネル展示を見て、子どもたちの発表を聞き、感極まり涙が出てしまいました。閉上や石巻の友人が被災し、あの写真の流された家のひとつかと思うと何度見ても涙が出ます。

子どもたちの発表によって初めて知ったこともありました。子どもたちは貴重な体験ができたと思います。これから多くの人に伝えていってほしいと思います。

子どもたちは、自分たちの体験活動をたくさんの人に発信できた達成感と来館者が自分たちに送ってくれた称賛の気持ちに大きな喜びを感じていた。S児は、この活動を通して、「私が相手がどう思っているか考えているのと同じように、相手も私がどう思っているか考えている」ことに気づき、伝えることが大切だと考えるようになった。来館者への報告活動では、伝えたり聞いたりすることに喜びを感じながら活動するS児の姿が見られた。

「発信する」におけるS児の学び

1年生から、伝えることがあまり得意ではなかったけれど、今回の研修で伝えることがどれだけ大切なのかがすごく分かったし、これから生きていく上で、伝えるということを大事にしていきたいと思った。

(5) 次の学びへ ～記録を残し、被災地への思いを継続できるようにする。～

「活動を記録に残したい」、「もっとたくさんの人に伝えたい」との願いから冊子(図10 A4版90頁)を作成した。冊子には、自分たちの学習新聞の縮刷版、東日本大震災の被害状況、さらに中越大震災当時の当校の学校だよりや活動の記録も合わせて掲載した。冊子を手にした子どもたちはうれしそうに活動を振り返り、形に残すことで、大きな達成感を味わうことができた。冊子は、長岡市内の公共施設に配付したり、被災地の小学校へ送付したりして学習の成果を報告した。自己の学びを広げると共に、より多くの人たちに自分たちの思いを伝えることができたため、子どもたちの満足度と東日本大震災への関心は一層高まった。



図8 発行した冊子



図9 冊子を活用して学習する在校生

発信を受けて次年度の6年生は被災地について調べる活動を始めた。ある6年生は、私たちは震災の状況を見て伝えることももちろん、復興について学習し、全校や保護者・地域に伝えたい。と述べた。本事業が次の学びへ意欲を喚起できたと感じられる。

A児は、卒業文集にこの東日本大震災被災地現地活動のことを記した。A児にとって、本事業は大きな影響を与え、被災地への思いや学習意欲が継続していると言える。「被災地へいつか訪れたい。」「温かい笑顔はもどってくる。」と被災地や自分の未来への展望を書き、自分も一緒に一步一步復興を進めていきたいという気持ちをもつようになった。

将来やりたいこと

平成二十三年三月十一日、東日本大震災は世界に衝撃をあたえました。M9.0、震度七の日本最大の地震と、メートルを超え大津波が東北地方をおそいました。たくさんの方が亡くなり、たくさんの方が悲しみに包まれました。

そして、この震災の後私たちは、被災された人たちのために何が出来るかを考え、代表委員会のみんなといっしょに、被災地へ研修へ行くことを決めました。研修へ向けて、被災地のことを少しでも多く知るために、いろいろな資料を見ながら勉強しました。

研修当日、平成二十三年十月十日・十一日、震災から七か月たった被災地を見た私たちはおどろきまじい町だったはずの所に家が軒や二軒しか立っていない光景、小学校が黒い煙に焼けている光景、その光景を見て私は、元どりの町に一日でも早く、一秒でも早くもどってほしいなと思いました。

私の将来やりたいことは、復興した東北地方をおとすれて、私たちが研修で行った宮城県石巻市の同じ所に行くことです。今の被災地の様子や復興した被災地の様子を見くらべたいと思うたからです。東日本大震災は、これまでになく被害がとても大きく、たった数年で簡単に「復興」できるものではないと思いますが、小さなことでも積極的に取り組んで、一歩ずつ一歩ずつ「復興」に向かってほしいなと思います。今は何も無い町にも、ぜひ笑顔に温かい笑顔はもどってくると思うので、その笑顔を楽しみにしていました。

私も、平成十六年十月二十三日に起こった中越地震や、平成十九年七月十六日に起こった中越沖地震を経験しているので、「これから、どうすればいいんだらう」という不安で心配な気持ち、本当に良く分かります。でも、いつまでも考えていないで前に進まなければ、復興はできないと思うので、前を見てがんばってほしいなと思いました。

これからも、私たちに復興を手伝えることは少ないけれど、東北地方の復興に向かって、せいっぱい応援していきたいです。そして、将来、東北地方をおとすれることを、とても楽しみに待っています。

図10 A児の卒業文集(原文)

6 成果と課題

(1) 「絆 つながり 子どもたちが見た東日本大震災」の単元構成の成果

① 「知的活動」と「体験活動」の繰り返しによる豊かな学び

子どもたちは、現地において、目の前の情景から被災時の様子を想像したり、においや音を全身で体感したりして、被害の大きさを実感することができた。「調べる」で収集してきた被災地の情報と「学ぶ」で体験した現実との差が子どもたちの心に大きな衝撃を与え、できる限り多くの人に自分の思いを伝えたいと考えるようになった。報告発表活動においては、多くの人から共感と称賛の言葉を受け、達成感を味わったことで、自分達の活動を記録に残したいと願い、冊子を作るまでに意欲を高めることができた。調べる（知的活動）→体験活動→まとめる（知的活動）→報告発表活動→次の学びへ（知的活動）で構成した流れの中で、事前の知的活動によって子どもたちの体験活動は主体的な意識になり、事後の知的活動によって深く追究され、学びが豊かになったと考える。

② 主体的な意識で取り組んだことによる体験活動の成果

現地体験活動と報告発表活動は、いずれも子どもたちが知的活動の中から「行きたい」「伝えたい」と主体性を高めたことで行うことができた。主体性は、言い換えれば学習への意欲である。現地体験活動では、被災地の現状を実感することができ、「伝えたい」という意欲をもつことになった。報告発表会では、多くの人に伝えることの喜びを味わうとともに、相手からの返信があったことで、大きな達成感を味わうことができた。さらに発信は、自己の情報を整理するだけでなく、活動を多くの人たちと共有したという達成感を味わわせる上でも有効な活動であったと言える。発信するだけの活動は多く見られるが、対話式の報告活動を設定することは難しい。発信に対する受信の場を設定することで、主体性は高まり、体験活動の意義を一層大きくしていったと考える。

(2) 現地活動が児童に与えた影響 ～抽出児童の変容と今後への期待～

① 伝えたい意欲が芽生えたS児

自分の思いを表出することが苦手だったS児は、被災地のすさまじい状況を見て、ここに住んでいる自分と同じ6年生がどう思っているのか聞きたいと感じた。そして、仙台市立四郎丸小学校と交流を行う中で、相手も同じように自分の気持ちを聞きたがっていることに気付き、自分から伝えることの大切さに気付いた。体験活動後の報告会では、「自分から進んで伝えたい。」という主体性をもって活動に臨み、来館者に声をかけていた。活動を終えて「伝えることが苦手だったけれど、自分から伝えたい。」と記録している。本単元は、S児に伝えることの大切さを芽生えさせた。

② 思いやりの気持ちが育っているA児

思いやりの心が育ってほしいと願ったA児は、土まみれの卒業文集から、そこに暮らしていた人々の心の傷を思いやった。この状況から推察される被害時の状況や被災者の心の傷が、A児に他者に寄り添う気持ちを芽生えさせた。活動後も被災地への思いをもち続け、卒業文集には「将来被災地を訪れたい、笑顔は必ずもどってくる。」と綴った姿からは、他者を思いやる優しい気持ちが育ってきていることが伺える。中越大震災の時の自分の心情についてもふれているA児には、これからも被災地への関心を持ち続けるとともに、思いやりの気持ちを高めていってほしいと願っている。

(3) 継続的な学びのための課題

当校は、本実践を基にして、総合的な学習の時間や修学旅行との関連付けを図り、児童の学びがより豊かになるように検討している。単年度で終わらせることなく、このような学びを継続していくために、教育課程の中でどのように位置付けていくかが課題である。

7 終わりに

「絆 つながり 子どもたちが見た東日本大震災」は、一人一人に大きな達成感と思いやりの気持ちを芽生えさせた。本実践が、被災地への思いを継続させるとともに、一人一人が災害に備える意識を高める一助となることを期待したい。

〈参考・引用文献〉

- (1) 2009 平野朝久 「体験と子どもの主体的なかかわり」『体験学習・体験活動の効果的な進め方』佐藤 真 教育開発研究所
- (2) 2009 木原俊行 「体験活動と教師の指導力」 同掲書 P64-67
- 2009 佐藤 真 「今、なぜ「体験」が重視されるのか」 同掲書 P86-89